

武蔵野日曜特別講筵

「羔の婚姻」(中篇) 新婦

1973年1月28日

小池辰雄

解題 第1歌「碧玉」 第2歌「即位」 第3歌「聖霊」 第4歌「ペンテコステ」、第5歌「新婦」
 第6歌「磐」、第7歌「会讚」、第8歌「初穂」、第9歌「ダマスコ」、第10歌「道や籬のほとりに」、
 第11歌「義」、第12歌「獣」、第13歌「来りたまへ」 第14歌「冠」、第15歌「鬼火」、第16歌「世
 界にそむきて」、第17歌「初の愛は失せたるかな」、第18歌「懺悔」 第19歌「神の都」、第20歌「帯
 縄跣足」、第21歌「星より星へ」、第22歌「何の平安か」、第23歌「義人は信仰によりて生くべし」
 第24歌「此処に私は立つ」、第25歌「予定」、第26歌「楽園喪失」 第27歌「純なるもの」、第28
 歌「野ばら」、第29歌「穀はいまだし」

● 解題

今日は『羔の婚姻』の中篇を学ぶことにします。「新婦」という題はもちろんキリストの教会、エクレシアを意味するわけです。中篇の解題にこういうことが書いてありますから、一応読んでおきます。

第1歌は序曲、中篇の詩題として新婦の新しき創造を掲出し、天にある夫人に思いを寄せる。第2歌は神の右に坐し給う羔たるキリストと、新婦をもやがてここに据えんとの神の聖意思を歌い、第3歌は新婦を造り且つ育むために聖霊の降臨し給うこと、第4歌はペンテコステの出来事、第5歌は聖霊によりて一つの体に組み成されし新婦教会の美を讃え、第6歌は教会の礎石としてのペテロの信仰を詠ず。第7歌「会讚」は羔の婚姻に対するバプテスマのヨハネ、アブラハム、ダビデ、モーセ、エリヤ、エレミヤ、並にイザヤの壮大なる讚美の合唱である。以下基督教を中心とする世界歴史の展開に及ぶ。即ち第8歌はステパノ、第9歌乃至第11歌はパウロの聖召、パウロにより救は異邦人に及べること、並に罪と義とに関するロマ書の問題を詩とし、第12歌はネロの迫害、第13歌は迫害のうちに輝きたる基督再臨の希望を歌う。第14歌はヨハネを詠ず。第15歌以下第21歌は順次、アタナシウス、ロマ教会の墮落、アウガスチンの悔改、神の都の思想、フランシス、及びダンテを主題とする。第22歌以下数歌は宗教革命詩にして、法王の墮落、ルーテルの信仰及びウルムス会議、並にカルビンの予定の信仰を歌う。次でミルトン及びカントを経て、第28歌はプロテスタント教会亦生命を失いしを嘆ず。第29歌は二千年の世界歴史に於て神の本質に関する真理はギリシヤに、人のなやみに関してはロマに、救に関してはドイツに啓示せられしが、尚最終に闡明せらるべきものとして「来世」の真理が日本に賦与せらるる使命たりとし、第30歌以下数歌は、その為の準備として見たる日本の精神史、理想の日本に對



する呼びかけ、幻滅の日本に対する悲憤、関東大震災を契機とする神の審判、次でアジア諸民族の救を歌う。第35歌は教会の微温俗化と神の警醒懲戒、而して第36歌は新郎の来臨新婦の顕現を待望する宇宙万物の呻吟を詠じて終る。——編者——

これが中篇の概略の内容です。大変なことです。

●第1歌「碧玉」

第1歌「碧玉」。「碧玉」は既に黙示録で学んだように、黙示録21章11節、19節に神の都が「透き通った碧玉のごとく」という言葉があります。また、藤井喬子夫人のことをこの「碧玉」に例えてもあるわけです。

1 𪛗やみて冬は過ぎさり

もろもろの花は地にあらはれ

武蔵野の空に雲雀さけぶ。

という出だしで出ている。そして、

4 世の創より屠られたまふ

羔をつたうて我らの歌も

いま憂愁の調をかき投げ

7 農のごとき平和と希望の

第二の大きいなる曲にすむ、

新しき創造を詩題にして。

10 ああ天才の楫もなく私は

人の曾て漕ぎゆかぬ海に

いかに憚らず船出したか。

13 高き所より吹きよせきたる

大風に真帆をはらませでのみ

ひとり安然に小艇はゆく。

16 海路は遙かに浪も荒い。

しかし舟ひと舵先にたちて

眼をあげひたすらに星をのぞむ。

19 深き暗黒の夜をここまで

みちびきたまひし聖霊の神よ、

ねがはくは農の歌をたまへ！

と言って、序歌の祈りがそこに出ている。しかしながら、現実の教会が必ずしもキリストにふさわしくない。そういう意味でどうしても贖いということが必要であるというような内容があるわけなので、第1歌の64行になると、



55 わがベアトリチエは私を呼ぶに

「兄弟よ」といはず、牧者を呼びし
シユラミの婦の言もてする。

58 おほよそ妻と呼はるる貴女らよ、

なんぢら朽ちせぬ飾りをおもはば

彼女のゆえに神をたたへよ、

61 そは数ならぬ彼女のうちに

奇しきみわざを神はほごし

「夫の冠」を編みたまつたゆえに。

64 地に起き臥すものが許されて

いと高き君の永遠のおもひを

おもふはいかに福ひなるかな。

67 モリアの山にその独子を

ささげし族長ならで誰か

酒槽ふむ父のなやみを知らつ。

70 癒えがたき傷痕おさへつつも

ふたたび往きて姦淫の妻を

愛しおほせし預言者のみぞ

これはホセアですね。

73 若かりし日の契りにそむきて

あだし神恋ふる民をも棄てぬ

エホバの愛を身にしみ憶ふ。

というような句があるわけです。

76 羚羊のごとく子鹿のごとく

山とび岡を躍りこえ来て

窓より覗き格子より窺ひ

79 「わが佳耦よ、わが美はしき者よ、

起ちていできたれ」と呼ばはるべき

羔のこころを知るは誰か。

82 ひとりの妻がその夫のために

いかなる存在であり得るかを

見るをゆるされし者こそ彼れ。

91 ああ地は彼女失った、地は

「彼れ」というのは先生自身のこと、「彼女」とは奥さんのこと、

ちひ
小くとも二つなく秘めおきし
東方の碧玉へんぎぎよくを失った。
「碧玉」と言っているわけです。

94 恵まれしこと多きものほど
歎きはまさる。晴るるをこばむ
わが眼を怪しむものは誰か。

自分が悲しむとしても、しょうがないではないか。十年間の結婚生活が非常に恵まれたと
いうわけです。

97 神酒みぎをささげて神神のまへに
笑柄ものわりとなりしゼウスの子の
バッカスですね、

歩みも私にかなふまい。

と言って、先生が非常に悲しみの自分のしょうがない姿をそう形容している。

100 そは骨の骨を裂かれながら
なほ肉にありて歩むにまさる
創造者の愛の悪戯なければ。

自分の半身が裂かれたというわけだね。
106 紛まぎらひもなく武しには死者びと。

彼の幕屋まくやはすでに壊やぶれた、
彼の体からだはすでに剥はがれた。

非常に深刻な言葉が出ている。それから第7連の127行から女性のことを歌っている。こころ
はちよつと注目を要する。女性とはどういうものかという、聖書の女性観ですね。

127 女性よ、なんぢこひつじのごとき
従順じゆんおよび貞潔てんけつに映ゆる

神の聖績みわざのいと奇しきものよ、
130 汝のうちにかぎりなくひそむ

生命いのちの秘義ひぎをみとめて私は
三たび七たび神をあがめる。

133 神の生命いのちは発してロゴスに、
ロゴスのいのち溢れて人に、

136 人のいのちは咲きて女性に。
祝福めぐまれたるかな、男性の栄光

キリストの栄光の栄光
至高者いとたかきものの三重の栄光！



「神―キリスト―男―女」というこの系列は、パウロがコリント書簡の中で言っていますが、それから来ている言葉です。非常によく書いてある。そういった信頼、従順の姿がかえって栄光であるという。今のいわゆる「男女同権」とか言っているのと違うという。社会的には同権で結構でしようけれども、本質というものは範疇が違うわけです。

139 天才が傑作におけるごとく

宇宙の生命いのちはなんちにおいて

おのが理想を見いでんとおもふ。

142 なんちを歌つて私は恥ぢない、

そは羔にひよめが新婦をおもふ

心にかよふ心と知れば。

145 奇しきものの創造者、神よ、

かさねて願ふ、われらを潔め

きよき新婦の歌をたまへ。

どこか別なところで、

「女性は花よりも美わしいものである」

ということを書いてあるところがある。

●第2歌「即位」

第2歌「即位」。これはキリストが神の右に坐して、地上では僕であつたキリストが天界に行つては今度は、王の王である。そういう意味における「即位」ということです。万物を統べおさめることを神に委ねられている、その事態が歌われている。第3連のところは、

43 屠られしものが羔よ、

もとよりなんちの父なる私

今日またあらたに汝を子とする。

これは詩篇第2篇の句からきている。

46 さらばわが子よ、進みてきたれ、

来りてこのわが永遠の座に

私の右に今より坐せよ。

「神の右に坐したもう」という、ステパノの殉教の死をとげる時に、「神の右に立ちたもうキリストを見た」という。

49 この日大いなる歓喜よろこびの日

もろもろの天の極はてまた極より

召し集めたるわが僕しもべたち

52 わが座をめぐりて咲きほころぶ



薔薇そうびの花の花びらしび稠しげく
列つらなるごとき万軍たむらの屯とんを

といて、天国の有り様を予見している。これはダンテの『神曲』の終わりの方の構想を先生は思い出して書いたのだと思う。それから、第2歌の112行のところ、

112 永遠の讚美になんぢにかなふ

うるはしき佳耦とも、きよき新婦はなよめ

「佳耦とも」というのは相手ということですね。

なんぢの愛のゆきめぐる体からだ——

即ち、夫と妻の関係はそうであるけれども、これは特にキリストと教会の関係において、エクレシア、キリストを信する者たちは、キリストの愛がこの存在にゆきめぐる、「汝の愛のゆきめぐる体」というのはいい表現です。それから第7連、一番終わりのところ、

127 わが子、わが言ことばよ、なんぢの衷うちに

「言」はヨハネ伝のロゴスですね。

待つといふ讚美はつひに発して

久遠くおんの黎明しのもをさますであらう。

130 そのとき汝は凡てのなかに

凡てとなりて満つるであらう。

神さまがこのキリストに言っているわけです。

讚美を宇宙そらの性さがとするまで。

これは注目すべき言葉。讚美を全宇宙の性質とする、全宇宙がこの讚美となるまで。

133 われらかやうに永遠の胸かほより

祝福讚美をおくり交かはすは

素もとよりかりそめの遊戯すまひびではない。

136 愛は真実である、厳肅である、

げにそは涙また血である

味あじうて十分に我らは知る。

139 凡てに於ける凡ての満盈みんえい！

その事の重さいかばかりかを

子よ、我らをして思はしめよ。

142 満みつべき者は漲みなるまでだ

みづからまづ満されねばならぬ、

その生命いのちは溢れねばならぬ。

145 さらに羔あひ、屠ころられしものよ、

なんぢを完つする半身を受けよ、

なんぢの骨の骨、肉の肉を！」

キリストの「骨の骨、肉の肉」としてのこの我々、このエクレシア、キリストを信ずる者たち。我々の存在が「骨の骨、肉の肉」である。

「我々にとつてキリストは霊の霊である」

といつか言ったと思いますが、そのことは忘れないように——そのことは先生は書いてませんけれども——キリストは我々にとつては霊の霊。これは我々の存在の中心にならなくては。では、いかに霊の霊であるかということが第3歌になると出てくるわけです、私の角度から言わせればね。また、もうひとつ言えば、

「キリストは我々の霊の霊であると共に、骨の骨、肉の肉である」

ということも言える。霊肉渾然たる救いの世界で、観念ではないですから。即ち、霊体として与えられれば、そこまで言つても差し支えないくらいな関係であるというわけです。

●第3歌「聖霊」

第3歌「聖霊」は非常に大事なところで、先生はこれほど聖霊のことを歌っているかと驚くほどのわけです。

16 燈火、何か。これぞ愛の火

聖父よりいでて聖子におよび

聖子よりいでて聖父にかへる。

即ち、父と子の間を交通しているもの。

19 父子にかよふ一つのころ

神と『言』の交りのむすび

満ちて全き聖霊の象徴。

22 いかに限りなく奇しいかな、

人格的存在の至聖所に

生命の充実をはらむ秘密よ。

25 永遠よりして生みたまふ父

また生れたまふその独子、

父の懷裡に子はいますね、

これはヨハネ伝の言ですね。

28 父をして子を、子をして父を

かたみに愛しかはさしむべく

永遠よりいます愛そのもの。

「愛そのもの」は即ち、パラクレイトスなる助主であるところの聖霊です。ヨハネ伝14章16節から18節、16章7節あたりのこのパラクレイトス、助主、慰め主ですね、それが「愛そ



のもの」。

31 この「彼」聖霊の君によりて

「私」ととなふる父なる君が

「汝」と呼びて子の君をいだく。

聖霊によって父が子をいだき、子が父にいだかれるという、その内在関係というものは聖霊によって可能である。

34 人格、人格と相合ふために

さらに第三の人格をむかへ

三つながらにして一つに生きる。

三位さんみ一体のこと。

37 三つながらにして唯一つなる

存在の奥義よ、愛するもの、

愛せらるるもの、愛そのもの。

父が「愛するもの」、子は「愛せらるるもの」。「われ汝を愛しむ」というのは、キリストが聖霊のバプテスマを受けた時に天界から来た父の御言がそうです。

「汝はわが愛しむ子なり、われ汝を悦ぶ」

という。即ち、「愛するもの」「愛せられるもの」、そして御霊——御霊は「愛そのもの」——それで三位一体ということになる。この聖霊がなければ、この関係が実質を持たない。「関係」と言っているあいだは、これは一種の観念ですから。関係が実質を有つためには、どうしてもそこに共通なものが来なければダメで、本当の関係にならない。

神はその似姿に人間を創造した。同質である。同質であるけれども、これは「つくった」とあるので創造者と、「つくられたもの」被造物ですね。これが即ち似姿である。似姿であるということは内的な同質性が、そのときにはやはりここに神性があるわけです、神の性質が、神性が。ところが、神性があるからといって、この関係を切ったら、関わりを切ったら、この神性は自らを絶対化するから、これは悪魔性になってしまう、サタンイズムに。即ち、首座天使が神の質をやはりいたっていたが、これが

「われ神の如く」

といって、この間を切って、自分が神たらんとした。相対的な関係においてあるべき存在が、関係ぬきの存在になろうとするときに、これがサタンになる。

だから、「罪」とは何かという、要するにこの関係を切ること。関係を切ることが罪。関係は、どこまでも創造者が主で、被造者が従。この主従の関係というものをなしにして、いくら神性と言ったって、それはダメなんです。

「私は神性を持っているから、神人合一だ」

なんて言っちゃったら、これはへたするとすぐ悪魔になる。主従の関係は、キリストが



「わが意志にあらず、汝の意志を成させたまえ」

という時に、これが本当の関係なんです。これは近代人には分からないですよ、今の神なき世界では。

「汝の意志を」と言つて、常に聖意をたてて信頼している姿、これが本当の関係なんです。聖書的關係、福音的關係がそれなんです。これはもう、キリスト自身が実証しているんだから、仕方がない。なにしろ、キリストにくればわかる。キリストはその關係を「父」、自分を「子」と言つた。「父よ」と呼んでいるときには——キリストは被造物ではないけれども、人間といつたつてそこところは違ふけれども——もう本質的に一つなんだ。同質だけれども、本質的には一つ。

「われと父とは一つなり」

という。それでありながら、なおキリストはいつも「父の意志」といつて父を立てて、

「自分の意志ではない」

と言う。罪なき者が「自分の意志ではない」と言っている。そういった神を絶対に立ててあるという、この關係が本当の關係なんです。

その關係がこの人間は切れてしまった。だから、「罪」とは、神性をもちながらこの關係を切つたときに、この神性が破れた。これが「墮落」という、「罪びと」ということです。

「人間は、万人は罪びとである」

というのは、この關係を切つてしまったということ。關係を切つたけれども、何かしらんけれども、求めるものはある。しかし暗中摸索にすぎない。それが「罪」なので、

「どういう考え方が罪だ、どういう行為をしたから罪だ」

とか、そういうことではない。存在そのものが神と關係なき存在となつたから、それが罪だ。その切れたことが背き、叛逆なんです。「關係」ということは非常に大事なことです。これはバルトの神学をみても、そのことを非常に強く言つてます。

でありますので、その關係をして關係たらしめるものは、御霊なんです。

「御意を成させたまえ」

と言つたつて、これはどうにもなりません、御意を成させる力が来なかつたら。それはこちらがぶつつぶれると、これは来るんです。關係の實質がそこに生ずる。

人間は愛せられるに値しない者、「罪びと」になつている。けれども、平伏ひれふしてしまう。その平伏しはどこで教わつたかという、その關係の回復はこの十字架がした。そこはもう新約の話になりますけれども。關係をして關係たらしめるものは——即ち自我をすつとばすこと、自己主張をすつとばしたのが十字架ですから——自己主張をすつとばして、「汝」と言うことをできるようにしたのが十字架なんです。「汝」と言うことが本当に言えて、

「私ではありません」

と言う時にやつて来るのがこの聖霊なんです。いいですね。これは非常に大事な根本のと



ころですから。これがつかめなかつたら、信仰はいつまでたつてもダメです。

直接的にただ「愛する者」「愛せられる者」「愛そのもの」なんて言っているのではない。本来はそうだけれども——それは神とキリストとの関係はそれでいいですよ、直接で——ところが、人間は、それは直接でいかない。どうしても一遍、十字架を通らないと。直接関係にもつていくものがこの十字架なんです。関係の切れたものを、関係をつなぎ合わす。「宗教」というのは「再結」というね——なるほどこれはまた面白いことになったな——宗教は「再結」「レリギオン」という。再結をして可能ならしめるものが即ち十字架なんです。再結するものは十字架。宗教という言葉は、もうひとつ言うと、十字架ということなんだ。これは大変なことだ。そういうことになってしまった。

今日は初めてそういうところに来た。なにしろ、集会ごとに何か新しいものを発見するのでね——発見と云ったって、今まで知らなかったということではないけれども——そういった事態の真理の関係をまたいよいよ新しくされる。再結とは即ち十字架が含まれていたというわけです。これは誰も知らん。

「宗教と福音はちがう」

なんて言うけれども、違わないんだ本当は。宗教の奥に福音がちゃんと隠れている。

40

かしら からだ
首に体の合ふがごとく

いのち
生命に生命を熔けあはしむる

奇しき生命ぞ聖霊の火。

まさに御霊は生命。「レーベン」(生命)と「リーベ」(愛)はまた一つなんです。「愛そのもの」とは御霊のこと。我々が「愛」と聞いたら、「御霊」と来なくてはいかん、他のことを考えては。御霊、生命、そこにもちゃんと光が来ている。ヨハネ伝は、「生命、愛、光」というのが自然に出てくる。考えて出てくるのではない。自然に出てくる。非常に明るい光の世界です。闇を消してから光があるのではない。光が来れば闇は消える。御霊がくれば罪は滅ぼされていく。まず「罪、罪、罪」といつて罪ばかり見ているうちに黒くなってしまふよ(笑)。そうではなくて、

「キリストよ、御霊よ」

とやっているうちに、黒い影はどこかへ行ってしまうわけです。福音というのはそういうんです。

「こうしてはいかん、ああしてはいかん」

という、「いかん、いかん、いかん」とやっていたら、これは「罪、罪、罪」と言うことと同じだ。「いかん、いかん、いかん」とやっているうちに、全体がいかんようなことになってしまふ。どこへも行けなくなってしまう(笑)。

ゲートなんていう人は太陽をしょつちゅう見ている。だから、非常に明るい。日本人はなぜこんなにみんな難しい顔して歩いているか。電車の中をみても、なにか苦虫をかみつ



ぶしたような顔して、本当の明るさというものがなにか欠けている、日本の社会は。なものか根本的なものが欠けている。要するに、本当の意味における宗教の世界がないから、光を持たないからです。そして、ちよつとぶつかつても、「何だ!」なんてな調子でしょ。

「いやどうも、ちよつとすみません」

と、ニコニコしやしない。もうとにかくおかしいですよ、見ているとね。子供をだっこしているお母さんがいても、「さあどうぞ」と言つて、女の子でも席に掛けさせるやつがややもするといなかったりね。どういうことですか。もう結局、日本は精神的に、どう考えても滅びに向かっている。すべてが商業主義だから。すべては商業主義から来ている。

「もうこんな国は亡びてしまえ」

と藤井先生が言ったのも当然ですよ。内村先生も、

「もう日本に愛想をつかした」

と言つた。

「二つのJを愛する」

と内村先生は言った。ジーザスとジャパンを。愛すればこそ、もう二人とも、内村先生も藤井先生も1930年に憤慨して天上に逝つてしまつたわけだよ、愛想をつかして。愛すればこそ、もう全身が怒りになつてしまつた。「羔の怒り」というのは恐ろしい。羔の怒りが来たら、もうお終いなんだ。日本はどう考えてもちよつとおかしい。教育界でも、気がついていても本当に勇敢に言うやつがないわけだ。もう本当に棄身でかからなければダメだね。まあ憤慨することばかりだ。もうしゃべるのが嫌になつてしまふんだ、時々な。

52 聖霊こゝろの殊ことなる使命しめいは何か、

我らわれらを一つひとつに結ゆぶがごとく

佳耦とともを私わたしに結ゆぶにあらぬか。

55 あたかも原始の人の胸より

取られて美うましき女性にょせいを成なしし

かの祝福の肋骨のごとく

58 土に属するアダムにあらぬ

天あまに属する第二の人なる

羔の座いすより差し遣はされ

61 彼の完まき生命いのちをもちいて

永遠とこしえの女性にょせい、きよき新婦しんぷを

造り育はぐくむことにあらぬか。

これは第3連の終わりの方を讀んだわけですが。それから、第6連の所にいきまして、

106 「わが子よ、汝おまえの要求もとめは善よいかな。

げに今いまなんぢがみとむるがごとく



聖霊の時代ときは来たのである。
ペンテコステ以降は聖霊の時代。新天地が来るまでは、聖霊の時代。聖霊の時代がいか
に悪霊の時代になってしまったかというわけだ。……

109 彼をおくりてすべての人を

天の生命に活かすことあらうと

しばしば私は約束した。

112 その時きたるを私は待った、

羔ほふられ、ふたたび生きて

みづから彼を遣はすべき時！

115 今こそ汝のゆえに

彼を私はなんぢに委ねる、

代りて地に住む復たの汝と。

118 永遠に私より、わが子より

出でて共にあるもの、永遠に

我等の生命を満たすものよ、

121 なんぢ聖霊よ、いざ起ちてゆけ、

先に混沌ちゆうもんの面をおほつて

秩序をこれに孕はらまししごとく

124 今より降りて罪の人類ひとを

汝の火もてバプテスマし、かくて

聖なる后おとこを創造せよ。」

即ち、人類の新しい創造は聖霊によるんだということが、今の第3歌の124行前後に書いてある。御霊の火でもって、

「この火燃えたらんにはまた何をか要せん」

と。「火」といえばギリシア神話にプロメテウスが……〔略〕……。

とにかく、火でもって文明がある。20世紀の火は原子力の火です。恐ろしい。太陽の現象がそうでしょ。太陽の現象を今度は地球でもってやって、本式にソ連とアメリカの原子爆弾を爆発させたら、地球はおしまいだ。

ギリシア語の「ヒプリス」「傲慢」です。人間の傲慢が、欲が要するに戦争をやっているわけだ。傲慢と我欲、結局すべてがそうですよ。大人も子供も同じことです、個人も社会も国家も。バカみたなものですよ。要するにこれでもってガタガタガタガタやっているわけだ。もう政治であろうと、経済であろうと、何であろうと、すべての問題の根源はどうしたって、人間の心の問題です。原子力が恐いのではない。心が恐い。これが悪玉となるか、善玉となるかで、世の中はひっくりかえるか立つか、地獄か天国かというだけの話。地獄



と天国を心が有つ可能性を持っている。地獄をもつ可能性が非常に多いんだ、心が。

これを天国にしなくては。この天国の火が、天来の火がこの心にともる。これが聖霊の火。人類の新創造は、新しき創造は——我々は新人なんです、御霊を受けた人たちが本当の新人で——自分を常に焼き尽くしながら、本当の火で今度は燃えていく。どう考えたって、この使徒的な信仰だ。

ペテロもキリストと一緒にいてダメだった。ところが、

「今にお前と一緒に本当になるぞ」

と。御霊がきたら、ペテロは、使徒行伝のペテロはこの新人であります。福音書のペテロは旧人なんだ、あれは旧い。福音書のペテロは旧人。ステパノを迫害したパウロは旧人。それから、ダマスコ途上で引っくり返されたパウロは新人。ペテロ、パウロ、ヨハネ、ヤコブはみな、彼らは御霊によって新人となった。キリストの弟子はたった四人ですよ。歴史を動かし、土台となり、根底となり、そういうものは、問題は本ものだけなんです。

もうたくさん弟子は要らん。本ものだけ。……あなた方が本ものになってくれなければ、私はここでやっている必要は何もないんだ。「本もの」というのは、それ自身が相対的に「いいの、わるいの」と、そんな話ではない。この絶対的な「御霊の新人である」ということがはっきり言えなくては。それだけの求めをもってこの集会に来なくては。

「今朝、友人が来たので、集会に行けません」

なんてダメだよ、まだそれでは。

「待っている、私はもう命懸けの所へ行くんだから」

と。それだけの人になってくださいよ。私たちはそれだけの集会をしているんだから。そこらの集会和違うんです。本当にキリストの弟子たちと同質の人間に私たちはなっていないと、そして本当に証していこうというんですよ。

本当のキリスト者は天才より少ない。けれども、誰でもがそれに成れる。そういう面白い事態なんです。誰でもが成れるが、しかし現実は何と少ないか。少ないからといって、へっこむ必要はない。

「私はこんなダメなやつだから、一番成れる資格がある」

ということ。内村鑑三先生が、

「私が救われなければ、万人は救われない。私が救われることが、万人が救済されることの証拠である」

と、あの戦場ヶ原の会話で言った。私は非常に好きなのところだな、あそこは。

「私の万人救済の悲願は、私が救われるから」

と言って、罪びとの首に内村先生も自らを自覚した、パウロと同じに。

そういうわけで、本当の新人。それだけの、御霊における、十字架におけるぶつつぶれと、御霊の力、(異言)、もうそれはどうにもならん。いいですか。



「私はどうにもならない、始末のつかない人間だ。天を相手とするやつは何も要らん」

と、西郷南洲が言った。無一物無尽蔵ということ。

藤井先生のこの詩を読みながら、私たちはまたその奥をぐんぐん行っているわけです。

●第4歌「ペンテコステ」、第5歌「新婦」

それから、第4歌「ペンテコステ」で、ペンテコステの事態が書いてある。けれども、先生ははつきりと異言の凄さはまだ自覚していらっしゃらないようだ。第3連のところに、

43 たちまちすべての舌はをどり

唇やぶれて、ラッパにまがふ

高らかなる叫び、楼とのをゆする、

46 「アバ、父よ、アバ、父、父よ、アバ！

イエスの父また我らの父！

イエスの神また我らの神！

と、ずっと出ているのは、これが全部本当は異言なんです。それからヨエル書の言葉が引用されて、100行前後のところに書いてある。

91 彼らはなんぢらの思おもふごとく

酔はない、今は朝あしたの九時ぞ。

こはかの預言者ヨエルによりて

94 言はれしところ、すなはち『神いふ

私は終の日にいたりて

もろ人にわが霊をそそがう。

97 汝むすこらの子こ女むすめは預言し

なんぢらの若者まぼろしは幻影を見

なんぢらの老人としよのは夢を見よう。

100 天には不思議を、地には徴を

私は示さう。主の大きいなる

著あしき日のきたる前に

103 血と火と煙の気とがあらう、

月は血に日は闇に変わらう。

救ひは主の名を呼ぶ者にある。』

あなた方は、ひとつの集会で、あるものをピシャッとつかまえて帰らなければダメですよ。私は集会しながら燃焼しているからね、あなた方も聞きながらもちろん燃焼している。それだから、何だか知らないけれども、力が来てしまつて、何が来たつて恐くないですよ。



何をか。女の人たちはどうぞジャンヌ・ダルクみたいになってください。けしからん野郎がいたって大丈夫だ。

133 「なんぢらひとへに悔改めよ、

イエス・キリストの聖名みなによりて

おのおの罪の赦を得べく。

136 されば聖霊なんぢらに臨まう、

この約束は汝らと子ら

また遠き者すべてにも属つく。」

「聖霊なんじらに臨もう」と。まだ先生はこの句にちよつと弱いところがある。本当はもつとはつきりと言ってもらいたい。「必ず臨む」と。「何々であろう」と所々に出てくる。

第5歌「新婦」

1 いかにも楽しくいかに善いかな、

はらから睦みてもろともにもあり

ひとりの新婦のごとくあるは！

4 聖霊ゆたかに羔より

くだりて彼らすべてに注ぎ

一つの体にこれを組み成す。

.....

64 「見よ、われシオンに一つの石を

すえる。試みを経たる大石、

かたき基もとのたふとき隅石。」

67 いかなる聖手みしての奇わざしき業わざぞ、

建築師いへづくりらの棄てたる石が

選ばれてここに隅すみの首石おやし！

「小池なんて野郎は」というわけで、みんなにけなされて、それがどっこい「隅の首石」になる。それはキリストがそうだったんだから。私はキリストのあとを歩きたいわけだ。

棄石すていし、それが隅の首石となる。この棄てられた棄石の上に、ペテロという磐が――

「汝を磐とする」

とキリストが言われた――ペテロという岩が据えられた、棄石の上に。そして今度は、パウロという大黒柱が立って、ヨハネという屋根ができた。これが大建築。使徒の建築はそうになっている。ペテロが土台石、パウロは柱石、ヨハネは屋根。全くそういうふうに出来ているよ。とにかく、ペテロは何たって最初の野郎だからね。パウロはもう構造が実にかツチリした構造の福音だから。これは骨格ですよ。ヨハネは天的な音信の――黙示録をみたってわかる――屋根だ。藤井先生もどこかで歌っている。そういうふうになっている。



ヤコブはぬけてしまっているけれど、特にこの三人の使徒ですね。キリストが棄石ですから、隅の首石。棄石とはいいい言葉だ。皆さんも棄石の意識になったら、これは一番最深の世界に入る。パウロ自身がそう言ったんだから。

「自分は棄てられた者で、世の塵芥ちりあくたである」

と。私はいつか「塵芥」と号に書いたことがある。ちりあくたであると。

94 いま火の靈くわいのバプテスマを受けて

なんぢ暗黒くわいの世より出でたち

新ひかりに光明の国ひかりにつつまる。

97 されば忘れよ、後ろのものを、

忘れよ、なんぢの父の家を

忘れよ、なんぢが生れし里を。

100 羔のほかに誰をか天にて

汝もは有たう、げに彼のほかに

誰をか地にて汝は慕はう。

天にも地にも羔のほかにわが慕うべきものなしと。

103 永遠とこしへに二つあらぬ真実

変ることなき服従こそは

新婦はなよめなんぢの朽ちせぬ飾り。

「服従」という言葉がよく出てくる。服従というのは、

「ちょっと仕方がないけど服従しよう」

なんて、そういう意味ではない——先生の言葉はちょっとそこところがある——むしろ、「信従」、信じ従う。あるいは「信頼」という言葉の方がもっと親しくていいように思う。今の若い人に「服従」なんて言うのと、すぐに何か抵抗を感じるわけです。信頼ですよ。信従。そこに本当の力がくるんだから仕方がない。これは詩篇73篇の、

「²⁵汝のほかに我たれをか天にもたん地にはなんじの他にわが慕うものなし」

(詩篇73・25)

という言葉からきているわけです。みんな過去のことを忘れてしまえと。

●第6歌「磐」、第7歌「会讚」、第8歌「初穂」、第9歌「ダマス」、第10歌「道や籬のほとりに」、第11歌「義」、第12歌「獣」、第13歌「来りたまへ」

それから、第6歌「磐いわ」。ペテロのことが書いてある。第6連のところに、

106 嵐たかじのと炎とは高樓たかじのに

聖靈ちは小さき群ちに満ちて

新しき日我が世に始まる。



という、ちよつと注目すべき句がある。

それから、第7歌「会讚」というところがある。

第8歌「初穂」はステパノの殉教のことです。そして、「汝らは聖霊に逆らう」ということをはつきりとそこにおいて、

97 「あなんぢら項強くして

心と耳に割礼なき者よ、

なんぢらは常に聖霊に逆ぶ。

これは聖書の文句と同じだな。

それからその次は、第9歌「ダマスコ」で、パウロの回心のところ。

10 アダムアダムの咎ゆえに万人死なば

わが子よ、なんぢの功ゆえに

万人生命を得ずして已まう乎。

13 肉にはすべてアダムを首に

聯なるごとく、霊にはすべて

なんぢを首に聯なるべくある。

即ち、万人救済の本願がちよつとここに表れているわけだ。

16 「選ぶ」はやがて事へしめんため、

「呼びだす」はやがて引かしまんため、

人類をなんぢの新婦とすべく。

19 げに新婦は生ひかつ長けて

異邦人を身に加へねばならぬ、

つひに全き人と成るまで。

即ち、選ぶだとか召命だとかいうことは要するに、先に選ばれ先に呼び出された者が他の人たちを救わんが為のことで、自分がいいから選ばれたとか呼び出されたとか、そんなことではない。即ち、全人類がキリストの新婦となる為の道であるというわけです。

第10歌「道まがきや籬まがきのほとりに」。これはパウロの異邦伝道のこと。

それから、パウロの信仰の内容が第11歌「義」という題で言われている。そもそも義とは何かということ。

第12歌「獣」はネロのクリスチャンの迫害で、嫌らしい内容です。女の人の読むに耐えない文句もありますけれども、あまり残酷でね。しかし、すべて「キリストのため」と言つて、みなその血なまぐさい迫害を受けながら、讚美していったことが書いてある。

第13歌「来りたまへ」というわけで、まさにこれは祈りの悲願。この「来りたまへ」という詩は非常に素晴らしいところですが、来世希望のね。朗々と詠みたくなるようなところ。ここは傑作の一つだと思う。



●第14歌「冠」、第15歌「鬼火」、第16歌「世界にそむきて」、第17歌「初の愛は失せたるかな」、第18歌「懺悔」

それから、第14歌「冠」。さつき屋根と言ったヨハネのことです。ヨハネの信ですね。

76 つひに「イエスの愛するもの」と

名にし負ふまで、その永遠の

生命の秘密をゆるされ見るに、

79 何らの栄光！ 祝福に富む

太陽とても物の数かは、

充ちまた満つる恩恵と真理！

82 寄り添ふ己も比べがたく

父の懐に永遠より

睦みていますその独子よ！

第6連のところ、

106 アジアの空に望月のごとく

冴えわたる姿、円かにして

使徒らの最初また最後。

109 何人もつひに及びがたく

光明の淵に身を浸しつつ

心ゆくまでに汲みし光耀

即ち、ヨハネの光の世界。

112 もしくは祭司の長の冠に

「エホバに聖し」と証明帯ぶる

純金の前牌にもたぐはつか。

115 暗黒はいささかの影もささぬ

光なるもの光のうちに

いますがごとく、光を歩み、

「光」という言葉が三回も出ている。こうやって少し言葉のあれを見ると、その次に、「愛」という言葉が三回でている。

118 独子をさへ付して悔いぬ

愛なるものが涯なく人類を

愛するごとく、兄弟を愛し、

121 かくて羔の完全のすがた

ほのかに浮ぶその面影は

眺むる者を驚異にさせよ。



124 あるひは戦闘すでになぎて
朽ちぬ勝利の冠にほこる
新婦の栄光をおもはず。

それから、第7連のところ、
127 地に播^まくたねの、初には苗
つぎに穂、つひに穂の中にして
充ち足る穀^{こく}の稔^こるがごとく

130 羔の体の生い立ちもまた
ユダヤ人を始め、ギリシヤ人
而して最後にインド人に。

福音の最後はインド人がやるのではないかという、ちよつとすごいあれですよ。藤井先生がなぜ「インド人」と言うかという、やはりインドには仏教の非常に深い直観の世界がある。それから来ている。瞑想、直観の世界です。

133 かくは建てられ万国の民を
ことごとく身に増し加ふべき
大いなる次序^{ついで}を典型^{かた}に見せて、

136 古き歴史の割礼をしたふ。
磐^{いは}なる。ペテロがまづあらはれ
神の都の礎^{いしづえ} おけば

139 自由を喜び思弁をこのむ
強く賢^{さか}しきパウロは嗣^つぎて
柱を壁をさかんに築く。

142 守らず論はず、わがヨハネ
胡蝶^{こぢやう}のごとくに真理を追つて
生命^{いのち}の伽藍^{がらん}の冠をぞ編む。

145 西洋二千年の時ののちに
曙^{あけぼの}すべき東の空の
栄光をきざして、美はしいかな。

それから、第15歌「鬼火」は、グノーシス。新約の中の特にキリストの受肉のことをい
い加減にした連中です。

第16歌「世界にそむきて」というのは、アタナシウスのこと。アタナシウスとアリウスとの有名な神学論争です。「ホモウジオス」と「ホモイウジオス」。この「i」があるかないかで違ってしまふ。ホモウジオスというのは「グライヒハイト」(Gleichheit 同質性)即ち、「キリストと神は同質性である」。ホモイウジオスは「エーンリツヒカイト」(Ähnlichkeit 近似性)。



「キリストは神に似る」という。「キリストと神は同質である」という、このためにアタナシウスはその当時のアリウス派の連中と論争して、遂にこれが勝つわけです。

139 「世界はアタナシオスにぞむき

アタナシオスは世界にぞむきて」

142 世紀の半は早や過ぎ去った。

その若き日に胸に咲きでし

神の聖子への初の愛は

凋むを知らぬアマラントであった。

145 吹きまく嵐、つんざく炎に

小ゆるぎもせず天そそりたつ

櫓のごとくにぞ彼は立った。

〔註：「アマラント」とはスミレの花〕

と。非常に名文句ですな。三位一体の土台をなすわけです。

それから、第17歌「初の愛は失せたるかな」。教会がぐらついている事態。

それから、第18歌「懺悔」。これはアウグスチヌスの『コンフェッション』(告白録)、アウグスチヌスの生涯。このころは先生は非常にアウグスチヌスを読んでいたし、また私たちもアウグスチヌスの『コンフェッション』を読んでいた。

「新町学廬」というのがありましてね——「藤井武の面影」〔著作集第九巻『感想と紀行』／第五章人物回想／二「恩寵の跡」〕に書きましたけれども——日・月・水・金と僕は週に四日行つた。月・水・金は夜学ですよ。プラトンとアウグスチヌスとキリストと神学史。先生はそれ原稿を書きながらやっていいたから、神学史の方は。ちよつとこれは荷が勝ちすぎてしまつてね、忙しくて。それで体をこわされた。それが先生の死の一つの原因でもあった。あれは先生はちよつとやりすぎてしまったな。あれをやめて、とにかく『羔の婚姻』一本にして、少し体を無理なさらなかつた方が——『羔の婚姻』が終わつたらもう何をしたらいいか——惜しかったですね、そのところは。

まあ人間というものはあとからいろいろあれしても、それはどうにもならんさ。奥さんが地上にいらつしやったら、『羔の婚姻』という詩は出来なかつたでしょうしね。とにかく、わけのわからないものです。

そこで、アウグスチヌスの有名な言葉の、

7 なんぢわれをみつからのために

造りたまつた。われらの心の

なんぢに憩ふまで休みを得ない。

ちよつとその言葉が弱かつたね。「休み」ではなくてむしろ、



「なんじに憩うまで平安を得ない」

と書いてもらいたかった。「休み」なんていうと、何か休日みたいな感じだ。

「汝のうちに、汝のためにつくられた。あなたの心の中に、御霊の中に憩うまでは、

本当の平安がない」

と。「休み」はちよつとまずかったね。私に言わせれば、これは「平安」です。安きを得ない。さっきの縦の関係です。縦の関係が立っているところが平安である。そうしたら今度は、横の関係に来るのが平和である。ベトナム和平だの平和だの言ったって、これがなかったらいつまでたつてもダメですよ。創価学会なんてのはもつとそういうところははつきり言えばいいんだ、本当は。遠慮しなくていいから。創価学会なんてのは、

「本当の土台は宗教だぞ」

と。宗教を政治に持つてくるのではないけれども、それだけの構造がはつきり言えなければダメですよ。日本にも、「キリスト教民主党」みたいなものが出来たつていいわけだ。

●第19歌「神の都」、第20歌「帯縄跣足」、第21歌「星より星へ」、第22歌「何の平安か」、第23歌「義人は信仰によりて生くべし」

第19歌「神の都」。これはアウグスチヌスのいわゆる「神の都」のことが歌つてある。

それから、第20歌「帯縄跣足」。縄を帯にし跣足で歩く。フランシス(アッシジのフランチェスコ)です。フランシスは1182年から1226年、12世紀から13世紀にわたつての短い生涯の人です。

43 孤独をわかつ妹背のごとく

手に手をかはし寄り添ひすすむ

貴女よ、その名は「貧」ととなへて

46

人を見るべき艶色あらねば

ちまたひみなつまはじき
街に鄙に爪弾つけ

世にはさながら無きごとき者

その彼の相手は正に、「世にはさながら無きごとき者」と書いてあるな。正に無者だ。私に言わせれば、「無者」と書きたいところだ。フランシスの恋人は「貧」なんだ。貧しさのことを「彼女」と言っている。徹底的に無一物で歩いたわけだ。そして瞑想の世界で、「ステイグマ」という——金曜日祈っていると掌から血が出てきたそうだね——キリストの十字架の形で祈っていると、そこから血が出てくる。貧と愛で生きてきたわけです。正にキリストのあとを行こうという、文字通りにそのような生活をしたわけです。

それから、第21歌「星より星へ」。これはダンテのことです。『デイヴィナ・コメディア』(神曲)の「インフェルノ」(地獄)、「プルガトリオ」(煉国)、「パラディーソ」(天国)の一番終わりの言葉はみな「ステラ」(星)という字です。ゲーテさんは「ゾンネ」(太陽)です。ダ



ンテとエレミヤが藤井先生は人間的に非常に好きだった。

76 ああダンテわが友！ ふるはぬ血の

一ドラムマとても遺らざりし

なんちの血脈をわたしは知る。

ベアトリーチェに対するダンテの涙のことが書いてある。そして、第7連に、

127 ああ神のみわざのいと奇しき

二重また三重の栄光なる

「女性」の了解者、わがダンテよ、

130 なんちがわかき日の祈りにそひ

いとも祝福まれしものにつきて

適はしくもなんちは語りしかな。

133 かつは羔の血に贖はれ

天の処にもろともに坐する

その新婦の輝かしさを

136 誰かなんちのごとくに曾て見

また伝えたか、パトモスの島に

顕現を見たる老使徒のほかは。

即ちヨハネの他は、お前さんが一番よく天国のことを歌ったというわけです。

139 祝福まれしもの私を去りて

わが魂つつろとなりしときに

一つの声がわたしを満たした、

奥さんが亡くなって、うつろとなったときに、

142 いはくベアトリーチェ逝きてダンテを

助けしごとく今よりそのうち

彼女はなんちを助くるであらうと。

145 なんちを私に想ひ起させて

かく慰めし人に祝福あれ、

これは内村先生の言葉です。内村先生が告別式の時に、

「これからはベアトリーチェがダンテを助けたように天界の喬子のぶこさんがあなたを助

けるだろう」

と言った。

聖婚の詩はその日はら孕まれた。

この聖なる結婚即ち「羔の婚姻」の詩はその日に孕まれたというのは、それでインスピレーションを受けて、ひとつ詩を書こうと思立ったわけです。内村先生がひとつのきっかけ



になっている。……

第22歌「何の平安か」。これは昔、あのアハブの後イゼベルキヤキが他の神々を持つてきて、イスラエルの信仰を非常に乱した。それと同じように法王が今、非常にいい加減なことで、法王なんて言いながら、キリストの本当の僕らしくないと。新しいイゼベルは法王たちであるというわけで、ローマ法王の墮落のことをいろいろ書いてある。

それから、第23歌「義人は信仰によりて生くべし」。これが若きルッターのところでは

106 一語、丈夫の矢のごとくに

心をつらぬく、すなはちなほも

その消息をさぐるは聖書。

109 「義人は信仰によりて生くべし！」

信仰によりて——行為ならぬ、

功績ならぬ、信仰によりて！

112 遁世ならぬ、修道ならぬ、

世を棄てるのでもなければ、修道院に入ることでもない。

ただ信仰により、恩恵のゆえに

キリストが遂げし贖罪のゆえに！

といって、新しい道が開かれたことが106行以下のところに出ているわけです。

●第24歌「此処に私は立つ」、第25歌「予定」、第26歌「楽園喪失」

それから、第24歌「此処に私は立つ」は、ルッターのあのウォルムスの戦いのことが書いてある。それから、第25歌「予定」。カルビンの予定説。

43 「私は憐れんとするものを

憐み、愛しまんとするものを

愛しむ」と、大いなる宣言。

160 「その頑にせんとするものを

また頑にしたまふならば

神なんぞ人をとがめたまふか。」

という躓きの言葉がある。これが予定なんです。

「神さまは憐れまんとする者を憐れみ、頑なにせんとする者を頑にする」

と、これはまたパウロが書簡の中で引用している。それをカルビンが「予定説」と言ったわけだ、神学的に。ところが、「憐れまんとする者」は、憐れみに実は価しない者を憐れむんだ、神さまは、憐れまんとする者をね。「好きだから愛する」というのではなくて、

「この野郎、しょうがないから」

と言って憐れむわけです。ユダヤ人は、イスラエル人は頑なな民、頑固なんです。頑固で



しょうがない。手にやけるような。そいつを顧みて、

「お前たちは大きな民ではなく、小さい民であり、また頑ななやつであるが、ただわれ憐れまんとするがゆえに」

というわけだ。そいつが即ち「選民」なんだ。選ばれたのは、偉いから選ばれたのではない。ダメだから選ばれた。パウロもコリント前書1章で書いているでしょ、

「無きが如き者、弱き者、カスみたいなやつが選ばれた」

と、神の国は。我々はみんなそういうカスみたいなものだ、この世的には。この世的に立派な人や利口なのはみんな福音にはこない。肉体に行き詰まったり、精神的におかしかったり、頭がバカだったりね(笑)。そういうので、まあ安心したらいい。ところが、

「この世の賢者は何かあらん」

とパウロが言っているとおりの。パウロ自身はこの世的にも優れた野郎だけれども、そんなものは塵芥の如く彼は考えた。無教会の先生方は正にエリートのような人たちですよ、内村鑑三、藤井武、塚本虎二なんていう連中は、みんな優秀なんだ。けれども、もし自分たちの優秀さをことあげしたり、何ものかと思つたら、それが鼻にいたり学問がものを言つたりしたら——塚本先生なんかその危険があつたけれども、頭がいいものだから。学問でたくさん本を持つていて、いろんな参考書を読んでね、何か先生の言うことが非常に権威があるような——そういうことで権威があると思つたらダメです。塚本先生はなかなか名講義をやつてましたよ。けれども、決してそれがただ知識を売っている講義ではない。知識は相当売りましたけれども、最後はそいつを引っくり返すようなことを言っているんだ、いつもね。

そこは先生の生きのいいところだつたけれども。どうしてあんなこと「脳軟化症」になつてしまつたかね。あまり夜、徹夜なんかして無理したせいもあるでしょう。まあ私自身が脳軟化症なんかになるか知らんけれども。とにかく、御霊の世界にのつかつて自由に動いていればまず大丈夫でしょうね。癌なんかにとつつかれるのは、やつぱり何か魂がしこつたりすると、とつつかれるかも知れないから、どうぞ、パリサイにならないように。

「精神的な癌の原因はパリサイにある」

なんて、これは新説だな(笑)。あなた方、何かはつきりしてくださいよ、本当に。……とにかく、真理に対してはキチガイみたいになつてくださいよね。……

「憐れまんとする者を憐れむ」

というのは、そういつたアガペーの愛で、「選ばれざる選び」というのがあるんだ。まだ誰も言わない、そんなことは。

「私は選ばれないで、これはもう浮かぶ瀬もないか」

と思つたら、そうではない。むしろ、あとになつて選ばれて、

「一番あとに笑う者が一番よく笑う」



というわけで、一番あとに救われる者が一番よく救われるかも知れないよ。だから、「人と比較して、どうのこうの」なんて思う必要はひとつもない。

「私はずいぶん回り道して来たけれども、天国に入るのが遅くなるかな」と思ったら、

「あとなる者はさきこ」

と、ちゃんとキリストは言っている(笑)。「それじゃ、ゆつくり行きましょ」なんて、そういう気持ちはいらんですよ(笑)。そういう論理は成り立たない。実存の世界というのはそういう平面論理は成り立たない世界、気合で分かかっていく世界です。やっぱり、キルケゴールやニーチェとかいう連中の味がわかるのは、私みたいなやつがわかる。非常に論理的な人にはなかなか分からない、あんまり論理的で。おもしろいよ、ニーチェというやつは。あれは引っくり返すと、非常に真理を持っている。しかしもちろん、とんでもない間違いをしていますよ、キリストに対しては。だから、キチガイになってしまったんだ。

そういう躓きの言葉です。「顧みなき顧み」とかね、「選ばれざる選び」という。いいですか。そこまですぶとい信仰にならなければダメですよ。

「どうも、私はいろいろ比較してみると、神さまにだいぶこれは見放されているようだな」

なんて、そんなことは絶対には絶対には参ってしまっただけかな? 楽しくならなければウソだよ。もうとにかく、相対的比較の世界にいたら、本当の世界に入れない。「神ーキリストー我」の絶対の世界ですから。そうじゃないですか、あの「カナンの女」なんてのは。キリストに拒まれた。「お前たちには関係ない」と。「かわりない」という、あの「木枯らし紋次郎」みたいに。キリストはあの紋次郎みたいだ。

「私はユダヤ人だけに関わっているんだ。異邦人にはかかわりない」

「でも、小犬ですらも机の上から落ちたパンくずを拾いますが、私もそのようなものですよ」

と。それでカナンの女のその言葉にキリストは参ってしまった。キリストはカナンの女に負けたんですよ、確かに。はつきり「負けた」と書けばいいんだ、聖書に。「キリストはただ一回負けました」と。それで、

「汝の信仰、汝を救えり」

と。キリストは正直ですから、そういうところでまたゴマカシの論理なんか使いやしない。パツと見るですから、その見る世界は。神さまを動かすものはこの砕けです。砕けざるやつが地獄に入る。それで結局は、その一番終わりのところに書いてある。

136 なんぢ頂を究めんとするか、

私はただ高みにをののく。

なんぢ争へ、私は奇しむ。



139 なんぢ論へ、私は信ずる。

高みを私はあふぎあがめる、
はかりなは
準繩をもかなぐりすてて。

142 ああ測りがたき神の審判よ、

ああ尋ねがたき神の途よ、
地を距る天もなほ及ぶまじく。

145 すべては神より、神ゆえ、神に！

神こそやがて凡ての凡て！
栄光とこしへに神にあれ！

一切のことは通して神の讚美にいくと。地獄に落ちても神を讚美する。神一切の人生であつて、自分の救いの人生ではないと。それだけの棄身のところになると、本当の救いの世界です。まあそこらのは違うんですから、しっかりとってくださいよ。

それから、第26歌「楽園喪失」。ミルトンの『パラダイス・ロスト』は、先生は愛読してたから、すらすら書いたんだな。

●第27歌「純なるもの」、第28歌「野ばら」、第29歌「穀はいまだし」

それから、第27歌「純なるもの」。これはカント。先生はカントを読みだしたら、二か月位カントばかり読んでいた。

「僕はこのところ二か月ほど聖書をちつとも読まないんだよ」

なんて言ったから、僕は驚いてしまった。カントばかり読んでいた。『純粹理性批判』と『実践理性批判』。まあ『判断力批判』までは全部お読みならなかつたらしいけれども。しかし、カントがいかに純粹に真理をききわけて窮極のところへ持っていったか。これにはもう驚嘆した。この27歌は傑作です、カントの哲学を詩的にこれだけの思想詩としては。

先生の叙事詩というのは——全体はドラマティックな構造ではない。ダンテにはかなわない——一つ一つがひとつのまとまった詩で、非常に叙情的な要素が強いです、詠嘆的な要素が。全体としては大きく宇宙の創造から黙示録まで至っているけれども、それがあるひとつのドラマティックな構造で展開しているのではない。しかし、その出来事の一つ一つ掴まえて、非連続の連続で展開している。一つ一つがあるまとまりを持ったものです。詩が7・8、8・7、7・7、たまには6・8なんていう構造で進んでいる。文句は実に大したものですよ。文語調が主体になって、口語が少し混ざって、こういう詩体をとるのはとにかく先生が初めてなものな。ほかにないです。現代の詩壇が藤井武の『羔の婚姻』を知らないなんてケシカランことだ、本当は。詩集にないもの。私は藤井先生の特別号を「曠愛新書」にそのうちにひとつ作りましょう。いつ作るかわからないけれども。

「純なるもの」とは、特に動機の純粹性というようなこと。それから人格の尊嚴。そ



うことが特に中心になっています。人格の尊厳とか、動機の純粹性とかいうのは、マルチン・ルターの信仰の性格からカントが受け継いでいる。ルッターなくしてカントはない。だから、日本の哲学者たちがキリスト教を本当に知らなかったら、ニーチェもキルケゴールもわかりっこない。それからドイツの哲学にしたって。このキリスト教はそつちのけにしているんだからね、全くおかしなもんですよ。東洋だったら、やっぱり仏教のものをちゃんと読まなくてははいかん。何といつてもこの二大宗教は人類の精神史のどん底をいつも支えている。これを捨てたら、もう人類はおしまいだよ。私は今度の『この道を往く』(獨協学園図書館リデンバウム叢書2、1973年2月発行)にはつきり書いてやったから。

その次、第28歌「野ばら」。教会が頹落したから野ばらになってしまった。ちようどイザヤ書5章でもって野葡萄になってしまったでしょ。

「始め神さまはこの葡萄園をよく植えたのに野葡萄になってしまった」

と書いてある。それと同じように野ばらになってしまったと。出エジプト、出バビロン、それから出カトリックというわけだ。遺れる民はしつかりしろということになるわけです。

106 夜は更けたけて日はや近づく、

今は眠より醒むべきの時

身の塵をふりおとすべき時。

109 さめよ、さめよ、わが薔薇の園！

培はぬ野の装ひを棄てて

なんぢの美はしき衣をつけよ。

といつて、第二の宗教改革への説明の言葉です。第一の宗教改革では、

「行為ではない、信仰である」

ときた。第二の宗教改革は何とくるか。もうひとつ奥の世界に、恵みの世界に来なくては。

「信仰ではない、恩恵である」

と。では恵みの実体は何かというと、御霊です。御霊という恵み。ドイツ語で「グナーデ」「恵み」「カリス」。「カリスマ」というと、御霊の「賜物」になる。「カリス」が御霊、恵み。カリスに来いと。「ピステイス」は「信仰」。もちろん、ルッターだつて聖霊のことは言っているんだけれども、特に行為に対して信仰というものを高めたことは争えない。

「義人は信仰において生く」

という。もう一つ、この恵の世界です。それで恵信一如ということ。恵信行一如なんだ、本当はね。行は跛行的ですよ、非常に。ちんば、びっこ。人間の行はびっこだよ。完全に行ずる人なんかキリストより他にありはしない。びっこだけでも、およそ行であるなら、どんなにそれが破れていても、本ものでなくてはいかん。整った行よりも、破れた本ものの方が上なんです。外からみて「ああ、あの人立派だ」なんて言つたつてダメです。そこはカントの哲学でもそうなんです。



「どんなに立派に見えなくても、善意志が本当に動いていれば、それはたとえ行為にいかなくても、それ自体限りなく宝玉のごとく貴きものである」
 と言ったのがその角度です。恵信一如。即ち恵み、カリスです。
 御霊における信仰とはそのことです。これが第二の宗教改革で、これは誰かがやるのではない。一人びとりがやる。

本当にそのようになってごらん。何も恐いものはないから。キリストがもうそこで白熱して燃焼しているようだ。黙っていたって大丈夫だよ。その人に触れたらぶつ倒れてしまう。電気がかかっているから、霊気がかかっている。本当にその世界で、可哀相な人に手を按おいてごらん。病気なんか治ってしまうから。自分を卑下してはいかんですよ。天下一品ですから、みんな。もうキリストが、御霊が来ているのは、誰でもが天下一品ですから、本当に。御霊がなかったら、これはしょうがないよな。

その次、第29歌「穀こくはいまだし」からは非常に大事なところですよ。藤井先生のこの『羔の婚姻』の中で非常に藤井らしい特色の出ているところです。エジプト・バビロニアの大河文明、それからギリシア・ローマの地中海文明、ヨーロッパの大西洋文明、第4番目はアメリカの太平洋文明、第5番目に東洋文明が待っている。この日本、中華民国、インド。けれども、今の中国ではダメだよな。毛沢東だとか、周恩来なんてのは大きな人物ですよ。けれども、もうひとつ奥の世界に本当に入ってもらいたいわけだ。これはもうゴマカシがきかないですよ、魂の世界は。一番深い本ものがあるかないかということ。

これは昔から東西古今を通じて第一級の宗教家が、宗教的人物が何といつても、その第一流ですよ。かなわんですよ。法然、親鸞、日蓮なんていうやつに合う人物が他に日本にいるかというんだ。やはり、そうやって数えてくると、みんな宗教的な人物です。ヨーロッパでもそうです。パウロ、ルッター、フランシスだとか、結局、人間として最高のところはみんな宗教家です、詩人であろうと何であろうと。大芸術家も、大政治家もみんな、一番根底に宗教を持っているやつが一番第一級の人物なんです。

言葉の一番深い意味における宗教ですよ。それはキリスト教とか仏教とか、そんな区別しているのではない。マホメットだって第一流の宗教家なんだ。そういうわけですから、どうぞ。これは適わないですよ、魂の世界は。栄西禪師なんていうのも凄いな、道元と並び称せられる。それで、アレオパゴスの演説のことも出てくる。

34 哲理の国には神の知識を

情緒の民には罪のおもひを

意思の族やからには救のみちを。

というのは即ち、ギリシアとローマとドイツ。「情緒の民」、ローマの代表者はアウグスチヌス。「意思の族」はドイツのルッター。アタナシウス、アウグスチヌス、ルッターのことはもう一遍ここで歌われています。



109 神のたかき本質はギリシアに
人の深きなやみはローマに
救の純なるみちはドイツに。
それで、一番終わりのところに、

127 「勇みて進め、わが聖霊よ、
私の勝利の賜物のうち

なほも残れる一つをとりとて。

130 最初には神、つぎには人、

人ののちなる救をつけて

最終に待つそれぞ来世。

133 来世のいのち現にうかび

地ながら天を住所とするまで

私の体の完成はない。

という、ちょっと注目すべき句がある。「来世のいのち現にうかび」というんだから、終末の生命が現実にかんて、「地ながら天を住所とするまで」即ち、天地一体だな、私に言わせれば。「私の体の完成はない」というので、それだけのところに来なければ、「私の体」即ちキリストの体、エクレスシアが本当の姿にはならないと。これは正に御霊の現実を言おうとしてゐるわけです。

136 早苗また茎また穂のごとく

この収穫の穀のためにも

適はしき国を父は備へた。

139 見よ、太平洋の濤のきはみ

東洋の最初、日いづる国

美はしの嶺のほふところ。

富士山のことです。

142 二千五百年の歴史を帯びて

そこに育まるる直観の民、

「直観の民」は日本人。非常に勘がいいし、それから直観する。論理でなくて、ものの本質をパッと観る。

理知でも情緒でも意思でもなく、
理知でも情緒でも意思でもなく、

145 なんぢの靈感によりてこののち

穀は彼処よりみのるであらう、

つひに私の鎌を待つまで。「

終末の歴史の終わりを待つまで、最後に靈感によって。「靈感によって」はもつとはつきり言えば、「御霊によって」ということです。「御霊の体現者たれ」ということです。即ち、「テオロギー」神学がギリシア、「アントロポロギー」人間学がローマ、「ソテリオロギー」救済学がドイツ、最後の「エスカトロギー」終末論が待っている。それが日本人の使命なんです。論理でなくて、それを本当に身に体せよと。「テオロギー」神学、それはギリシア。それから「アントロポロギー」人間学、即ち罪の問題はアウグスチヌス。それから「ソテリオロギー」救済学はルッター。それから最後は「エスカトロギー」——「エスカトス」というのは「終わり」という字——これは終末論。

藤井先生は「来世」と言っているけれども、今の言葉でいうと「終末」です。「来世」というと、何か死んですぐ行くところなんて思うが、そうではないです、「終末」というのは。歴史の終わりですから。最後に来らんとする世ということですが、もし「来世」という言葉をそのように解釈するならば。

そういった、御霊におけるところの神秘的直観です。「神秘」「ミステリオン」というのは「奥義」という字だからね。パウロが「福音の奥義」と言うのは、神秘という意味ですよ。神・キリスト、キリストは神と一如の世界。パウロは、

「われキリストのうちに、キリストわがうちに」

という、パウロの神秘。これはそれでなかったら、信仰の本当の世界ではないですよ。如来さんの世界だって、みんなそうです。

私が無教会にいた時にこの「神秘」という言葉を非常に警戒した。無教会は警戒したから、「本当の信仰は神秘ではない」

なんて。神秘というのを非常に警戒していた。藤井先生もそうだった。まあ詩のこの辺ではそうでないけれども。それで、

「信仰、信仰。信仰のみの信仰」

なんて、信仰一点張りだった。もつと大胆に本当の神秘の世界に入らなくては。御霊を受けてないから、この神秘という言葉を本当に使えないわけですよ、警戒してしまつて。ただ神人合一かと思つて、「危ない、危ない」なんてなわけで。いつも

「十字架、十字架」

と言っている。それは十字架に相違ないけれども、それがお題目になつてはどうかにもならないですよ、十字架を通して御霊の世界に入らないことには。

第30歌以下はこの次にしましょう。これは仏教のことが相当出てくるからね。今日は29歌まで。では、そこまで。

